

# うちの土でどうやって作るの？

## 22

就農人口の減少、耕作放棄地の増加が進む中、各自治体は新規就農を志す人達への門戸を広げつつある。それと共に、新たな農業参入者の中には、農業を単に家代々の「暮らし」としてではなく、「ビジネス」として考えようとする人達が増えてきている。そんな新規就農者にとって大切なのは、既成概念の枠を超え、距離を超えて、多くの「経営」と接することである。就農4年目の福井市・片岡仁彦さんの場合。



作物の生育不揃いは、湿害によってもたらされる可能性が大きい。写真下のブロッコリー畑では、特に写真手前側に不揃いが多く見られる。縦浸透の良い土質であるにもかかわらず、湿害が出るということは、土中に硬い耕盤ができている可能性が疑われる。





積極的に農業に取り組んでいる片岡仁彦さんは、遠隔の丘陵地の農業経営者、鈴木政太さん（福井市中角40・17）との経営上の協力関係を模索している。その鈴木さんのブロッコリー畑と、片岡さんの水田転作大豆畑を訪ねた。

## 既成概念を持たない農業こそが 大事な技術を培う

Uターン農業という言葉は、随分と以前からありますが、この内容は年を追って変化していると思います。

農家の長男が、その家に継承された代々の土地を農業として営むことで、Uターンが成り立つというようなことは、今や稀なようです。

現実に入入の問題もあると思います。が、今から農業をしてみようとする人は、単に農業によって生活の営みができるというようなことではなく、自分の描く経営像の中に、一部自作地が有るといった感覚の人が多いようです。

今回の片岡さんも、サラリーマンをやめて、4年前から農業に取り組み始



片岡仁彦さん

福井県福井市江守中1-512  
☎0776-34-7758

めた人の一人です。

本誌でも様々な機会をみて、農業者の異業種交流を力説していますが、この片岡さんとの話しの中にも、多くの他の業界の常識からみた農業界の閉鎖性や経営スピリットの問題が話題となりました。

まず彼は、全体像を見渡すことに努めているようです。

農業の生産から販売までについてもそうであるし、借りられる農地の選定、何の作物を作ったらよいか…など様々なゼロからの発想によって、模索していることがよく理解できました。

何の仕事でもそうですが、この最初

の段階における、既成概念を取り払ってからスタートすることの大事さは、最も重要なことです。

特に今回は、土壌と施肥そして栽培体系についての現場ディスカッションが中心だったわけですが、あくまで基本を大事にして、知識を習得していくという姿勢が、これからの経営にプラスになるのだらうと思われました。

まず、新規就農者やUターン農業者は、資金面において困難の第一段階にぶつかるとは、この時多額の借入金によって、大型施設や重装備をしてしまうと、その後の行き詰まりが心配されます。しかしまずは、1反の面積で利益の出せない人が、何町歩広げても金儲けにはならないという原則をよく考えてみるのが大事なのではないでしょうか。

例えば、家を新築するのに、初めに住宅展示場へ行って自分にあつた家や、そうでない家を見学することは大変参考になるはずですよ。

これと同様に、農業も、まず他の人の経営をたくさん見せてもらうことが大切です。

これが、10年、20年前の就農であるとして、どうしてもその地元、地域との強い連帯が第一で、遠く距離の離れたところの人がやっていることに興味を持



鈴木さんのブロッコリの圃場で不揃いが顕著な部分を剣スコップで掘ると、写真（右）のような土壌断面が観察された。深さ20cm位を境に土の密度が違うのが見て取れる。写真（中）は柔らかい層を落とし硬い層を露出したもの。更にこの下に柔らかい層があるので、サブソイラで心土破碎すれば水はけはよくなる。写真（左）は、硬度計と物差しで、柔らかい層／硬い層の深さ、硬度を確認しているところ



今年初めての水田転作による大豆栽培は、片岡さんにとって厳しい結果となった。ほとんどの実が写真（上）のようにかびで腐ってしまっている。しかし、写真（右）のように、根はしっかりした状態にあり、順調な生育を遂げていたことがわかる。異常気象がなければ多収が望めたはずだ

つくらのことはあっても、それは別の世界の話であって、自分がそうなるうといったところまではなかなか考えなかつたはずだ。

ところが現在の経営感覚を持った人は、片岡さんもその一人ですが、遠隔地の人と経営上のジョイントを考えているわけです。

近隣の農業者とは、作物や作付体系、時期の問題等同一であるため、ジョイントして経営開始初期の資本やリスクを分担し合うことが難しいのです。

そんな営農開始4年目の片岡さんは、経営仲間の鈴木さんと、様々な面で相談や、情報交換、将来の機械設備等の共有化も含めて自分たちが孤立化しないよう模索しているようです。

鈴木さんの取り組んでいる6haの秋作プロットコリーの圃場に案内されましたが、まず圃場全体を見廻しみて、すぐその不揃いな生育に気がつきました。

生育の揃いがよいことが、まず障害を受けていない証なのですが、不揃いが一目でわかるくらいでした。また、圃場内の特定の場所が、まとまって悪い生育となっていました。

このような現象は、湿害によるものであることが多いのですが、その推測が正しいか、土壌断面を調べてみまし

た。剣スコップで掘り始めたところ、約20センチメートルのところに硬い耕盤があることが分かりました。

このような障害をもった畑は、全国にいくらかもあるのですが、この調査やその原因をよく知ろうとする農業者は実に少ないのです。

就農4年目、しかも農業をどうしてもやってみないと、元々の厳しい条件の中で営農を開始した片岡さんは、素直な、先入観にとらわれない見方で、土壌断面を見ていました。

この地域での経営は、零細で、トラクターも20ps程度のもので、現状維持が精一杯というところでした。

このような背景の中からは、経営の改善はなかなか生まれずらく、その結果としか言いようのない荒れた畑が回りには点在していました。

彼等は、そのような荒廃地を借り受けて、改良し畑作に取り組もうということでした。

その計画に賛成できたのは、この土壌が、改良さえすれば大変に生産力を保証できる種類のものではあったからです。

土性、これは土壌の粒径の違いによって粗い／細かいに分別するものです。この土は粗い砂壤土でした。

現段階では、たまたま20cm以下が硬

く、圧密していますが、これをサブソイラーにより心土破碎すれば、心土の縦浸透による地下水の流れが生じて、表層土の根の生育に大きな変化が生まれて、高い生産力のある圃場に変わるはずだ。

これが、このようなサラサラとした砂壤土だから改良し易いのですが、強い粘性を持った土では難しいことです。

よく粘土質の改良には堆肥のような有機物を入れて物理性をよくしなさいと指導機関は言いますが、現実には借地で短期間に勝負するにはとても間に合う話ではありません。

自作地を持たない積極的な借地農業は、今後、最も成長を見込める形態ですが、その借り入れる農地をよく選べる能力が必要です。

次に片岡さん自身の取り組んでいる11haの水田転作による大豆栽培の状況を調査しましたが、前代未聞の秋の長雨、台風、高温多湿、これらが9月10日頃までの順調な大豆の生育を全てゼロにする結果となってしまいました。

この水田転作は、灰色低地土に属する土壌であり、その排水性はよく、転作田としては一級品ともいえる水田地帯でした。

そして、大豆作のそれぞれの管理作

業も適期に中耕除草、防除等が行われており、最後の念実を待つだけだったことが現場でよくわかりました。

収穫作業をしても、そのコンバイン代もでないような状況ですが、農業共済に加入していたということで、何とか最悪の事態はまぬがれそうだったことです。

大豆が立毛状態で、さやの中で念実前にカビが生え、腐ってしまったというのは、大豆作の長年の経験者に聞いても珍しいことのようにです。

これは今年の状況ですが、この圃場は、このような秋の異常気象がなければ、確実に大豆多収を狙える場所であることは間違いありません。

また、このように転作に適した水の縦浸透がよい水田地帯は、稲作もやはりやすい場所になります。

日本全国に、この種の灰色低地土は耕作全面積の22%程度となりますが、この土と取り組んでいる人は是非このことをよく考えて下さい。

そして、Uターンや新規就農者は、まず周りの人々の言うことを先入観を持たず、本当はどうなんだろうと疑問を持ち続けること、成功例、失敗例をたくさん見せてもらって、自分の経営を目指すものに近づけていくべきだと思えます。